

院内広報の力

職員をつなぎ、文化を育む

これまで、外部に向けた広報や翻訳者としての役割を取り上げてきました。今回は視点を院内に移し、職員同士をつなぐ「院内広報」の力について考えてみます。外部広報に比べて軽視されがちですが、院内広報こそ組織文化を育み、優秀な人材の離職防止や病院経営への関心を高め、さらに、「この病院らしさ」という色を形づくる大切な役割を担っています。限られた予算と人的リソースのなかで効果を生み出す院内広報について考えていきます。

複雑な組織でこそ 必要とされる「見える化」

病院は医師・看護師・コメディカル・事務職員など多様な職種が協働する、非常に複雑な組織です。それぞれの専門性が高いからこそ日常業務は縦割りになりがちで、他部署がどんな仕事をしているのが見えにくくなります。

以前は飲み会や職員旅行といった交流の場が、部署を越えた関係づくりや文化形成を支える一助となっていました。しかし、コロナ禍や働き方の変化でその機会が減り、院内でのつながりをどう維持

するかが新たな課題となつていきます。そこで注目されるのが、院内広報の役割です。

一方で、医療界は転職が比較的に容易で専門職ほど流動性が高い傾向にあります。「自分は評価されていない」「病院の方向性がわからない」と、優秀な人材が離職するリスクは常に存在します。採用・教育にはコストと時間がかかるため、定着率の向上は経営課題そのものです。

院内広報は、病院という大きな仕組みのなかで「自分の役割が見えている」「病院全体の動きを理解できる」と職員に実感させる場を提供します。これは離職防止に

直結する「見えにくい」が確かな投資効果だと言えます。

頑張っている人に 光をあてる

私たちが重視しているのは、普段なかなか注目されにくい職員を取り上げることです。立場的に目立つ医師よりも、看護師やコメディカル、事務職員により意識的にフォローカスしています。

院内報で「スポットライト」というコーナーを設けてこうした職員を紹介すると、「自分の仕事を理解してもらえた」「取り上げてもらえて嬉しい」という声をいた



盛田滝斗 (もりた・たきと)

名古屋掖済会病院 広報部 課長補佐/
医療経営士2級